は，現地社会の暴力的状況をどのように記述すべきかがきわめて難しいことである．彼女たちの困窮状態や暴力の経験を「悲しみ」や「哀れみ」という共感から，あるいはもっと明確に「問題」として記述すればオリエンタリズムの称揚となり，他方，自らに向けられる「抑圧」のベクトルを躱したりずらしながら日々をたくましく生きる当事者のエイジェンシーを記述すれば，暴力を包摂する抑圧の構造を黙認することになるからである．つまり，どの立場からの記述を試みても諸刃の剣とならざるを得ないのである．

本書を読み進めての結論としては，この難題への明確な答えを示すものではなかった．つまり，本書では，南アジア社会の問題群をここまでは明らかにしたが，「問題含みの残酷な社会とみるのか，現地の人々のエイジェンシーに希望を見出し，社会や文化の暴力性にはひとまず目を瞑るのか，その先をどう考えるのかはあなたたち次第ですよ」と，事象に対する責任の所在が書き手から読み手に転嫁されているように感じたのである．人類学はこの命題をはたして乗り越えられるのか，あるいは乗り越えずにこの定位置を保持すべきなのか，評者自身が今一度考えさせられる契機を与えられたようにも思う．

引 用 文 献

アガンベン・ジョルジョ．2003.『ホモ・サケル—主権権力と剥き出しの生』高橋和巳訳，以文社.

下條尚志.『国家の「余白」—メコンデルタ 生き残りの社会史』京都大学学術出版会，2021 年，570 p.

今村真央 *

「脱植民地化のなかで生じた長期の戦争や，国家政策に起因する政治経済的混乱」に巻き込まれた人々はいかにして生き残ったのか（p. 5）．筆者は現ベトナム南部メコンデルタを対象に，この問いを追求し，明確な答えを提示している．それは「『国家の介入しにくい空間』（p. 52）を創り出してゆく」（p. 6）というものだ．より具体的には，「家や屋敷地，寺院，精米所や闇市といった空間」（p. 504）である．このような空間を，筆者は「国家の『余白』」と呼び，そこでは「国家秩序とは異なるローカルな秩序の原理が働」いたと主張している（p. 66）．

本書の強みはまず，南ベトナムでの現地調査から筆者自身が直接入手したデータの質と量にある．下條は，人口約 15,000 人の村落（ソクチャン省フータン社）に住み込み，長期フィールドワークを実施した．「ベトナム南部の一村落で一年以上の住み込み調査を実現したのは，ベトナム戦争終結以来，おそらく筆者が初めて」（p. 23）であり，本書にはオリジナルなデータが満ちている．ベトナム南部の多民族社会でベトナム語とクメール語を駆使して無数の聞き取りを実現した著者の能力に評者は圧倒された．

下條は，精力的な聞き取りに基づいたオー

* 山形大学人文社会科学部

ラル・ヒストリーを編み上げると同時に，その内容を地方雑誌や統計資料を含めた膨大な文字史料に照らし合わせることで，重厚な研究書をまとめあげた．「社会史」と名付けられているものの，筆者の狙いは時系列の物語を提供することではない．歴史学と人類学の手法を柔軟に組み合わせ，多様なトピックを論じている．トピックごとに先行研究を検討し，自身の調査を大きな学術的系譜と接合している様に筆者の高い研究能力が表れている．

また，20 世紀後半を対象にしているという点も本書の強みである．近年，統治の度合いが低い空間―「非国家空間」「周縁」「余白」「フロンティア」といった語で表される―に焦点を当てた研究が目覚ましいが，その大半は国民国家形成以前の状況を論じたものであり，20 世紀後半を詳細に論じる単著は希少だ．

すでに国際開発研究と大平正芳記念賞を受賞しているという事実が示すとおり，本書は高い評価を受けている．多くの選評や書評もすでに発表されていることから，この書評では本書の章ごとの内容紹介などは割愛し，評者の批評を積極的に提示することで，議論のさらなる広がりに貢献したい．ここでは「国家の介入しにくい空間」と「生き残り策」の比較研究に向けて筆者にひとつの問いを投げかけたい．それは「ローカル」についての問いになる．

本書において「ローカルな秩序」が中核的なキーワードであることは明らかだ．この表現は第 9 章「社会主義改造下のローカルな秩序」および終章第 6 節「近代国家の弱さとローカルな秩序の強さ」のタイトルにも用いられている．下條によれば，国家の失敗は「ローカルな秩序を把握することができなかった」（p. 513）ことであり，学術研究においてもこれまで「ローカルな秩序体系が十分に解きほぐされない」（p. 519）と指摘されている．しかし，本書全体において「ローカル」がどのような分析・分類概念として使われているかは必ずしも明瞭ではない．

まず本書において「ローカル」がいかなる意味で用いられているかを確認しよう．この語は主に 2 つの意味で用いられていると見受けられる．まずひとつは，「その地に限定される特有の」「局所的・局地的」「在地的」という意味だ．本書では「ここの地域社会に内在する…ローカルな秩序体系」（p. 519）といった表現が用いられている．下條が「ローカルな秩序は特に寺院で顕著に生成されており」と語るとき，「ローカル」は「その場所に限定された」という意味で使われているようだ．英語の人文地理学の用語であれば「place-based」といった用語がより適切かもしれない．この意味での「ローカル」と対立するのは，「移動できる」「動かせる」「流動的」―英語であれば「mobile」―といった語になるだろう．

同時に本書において「ローカル」は「小規模の」という意味でもたびたび使われている．筆者は「ローカル」を「ナショナルかつグローバルな次元」や「ナショナルかつグローバルな規模」としばしば対比している（pp. 519–520）．「ミクロな地域社会」（p. 36）に焦点を当てる「ローカルで微視的」

（pp. 519–520）な調査を下條が奨励するとき，「ローカル」という語は，「グローバル」や「マクロ」に対立する，スケールの概念として用いられている．つまり，本書で「ローカル」という語は主に，「局地的」と「小規模空間」という 2 つの意味で用いられている．

しかし，本書ではこの 2 つに反するような意味で「ローカル」が使われることもある．人々の移動にも，そして大規模な現象にも，「ローカル」という語が用いられるということだ．たとえば，筆者は「カンボジアへ越境移動することは，生き残り策のひとつとして慣例化してきた」（p. 501）と指摘し，人々が「国境を超えた広域空間のなかを移動し…ローカルな秩序を再編成してきた」とある（p. 500）．また，下條によれば，「国家の力が及びにくい空間が無数に拡がり，戦死を恐れた人々はそれを隠れ蓑として利用するようになっていた」（p. 326）．そして，「国家は…国境を超えた規模で際限なく拡大していったローカルな秩序を制御できず，次第にそれを黙認，容認していくようになっていった」（p. 514）．つまり「国家の介入しにくい空間」は「ローカル」でありながらも拡大・増加すると筆者は説明しているわけだが，無制限に拡大する空間現象をはたして「ローカル」と呼ぶべきだろうか．[1)]

本書では議論の展開とともに「ローカル」の意味が横滑りし，その指示対象がどんどん広がっていないだろうか．最終的に「ローカルな秩序」はあまりにも多種多様な現象を含む，キャッチオール的な範疇になってしまっていないだろうか．本書は，ナショナルやグローバルな見方に対して警鐘を鳴らし，ローカルへの眼差しを繰り返し奨励しているが，グローバルを対象にする民族誌にもすでに蓄積がある［Marcus 1995; Tsing 2011］今日，筆者がなぜ「ローカル」をそこまで持ち上げられるのかが評者には理解できなかった．

下條は，寺院も「ローカルな秩序」として分析しているが，上座部仏教の寺院ネットワークを「ローカル」の範疇に収めることは難しいだろう．仏教のような世界宗教こそローカルを超える現象であり，各寺院レベルでの機能を仏教の超ローカル性から切り離して分析することはできるのかという点で説明がほしい．寺院という空間に逃げ込む人々には，仏教寺院をとおしてローカルを超えることを望んでいる，という側面があるのではないだろうか．[2)]

筆者は生態的条件よりも社会関係や文化制度に注目し，「国家の介入しにくい空間」は「地域社会の家族やごく近しい親族，地縁，上座仏教徒間の紐帯，米取引関係といった緩やかな人間関係の連鎖」によって維持されてきたと説明している（p. 504）．[3)] 人間が維持している「国家の介入しにくい空間」は，人の移動とともに移動できるというのが筆者の

1）「地域」もまた精査が必要な用語だ．本書では，「ローカル」と「地域」が同義で使われていることもあるが，意味が異なっているときもある．「地域」の語用について評者が先行研究に明るくないこともあり，この書評では掘り下げることができなかった．

2）「秩序」についての説明がない点も評者は気になった．「秩序」よりも「制度」の方が先行研究とつながる議論になったかもしれない．

認識だろう．しかし，そのような認識であれば，属地的概念よりも属人的概念を用いる方が分析の焦点がより明瞭になったかもしれない．

文化人類学では，1990年代にグプタとファーグソンが，「フィールド」や「ローカル」などさまざまな空間的用語を俎上にあげて，これらの概念は実のところ安易な前提に依存していることを鋭く指摘した［Gupta and Ferguson 1997a, 1997b］.[4] これらの批判を受けて，英語圏ではその後「local（ローカル）」という空間的概念よりも「vernacular（民俗語）」という言語学の語が比喩として盛んに用いられるようになったと評者は理解している．「ローカル」は属地的現象を指す語だが，「vernacular（民俗語）」は属人的な特性や能力を表せる語だ．生態を語るうえでは地理的概念の方が適しているだろうが，制度や行為など属人的な現象を論じるうえでは言語学的概念の方が有効だろう.[5]

実のところ評者は，脱ローカル的現象の描写にこそ本書の魅力を感じた．本書の主な舞台は「フータン」と呼ばれるベトナム南部ソクチャン省の町であるが，筆者はこの町のみならず，複数の場所でフィールドワークを実施した．「ソクチャン省の他地域やメコンデルタのカンボジア国境地域，またフータン社の人々の主要な移住先の一つである隣国カンボジアの首都プノンペンなどを訪問して出会った人々に聞き取りを行い，可能なかぎり広域的な観点から」現地調査を進めた（p. 22）．この調査をとおして，複数の場所が相互につながっていることを明らかにしている．本書はすでに「ローカル」を超える研究を実践しているのだ．

メコンデルタの人々の生き残りほど，さまざまな空間的枠組みを組み合わせるオーラルヒストリーの対象にふさわしいトピックはないかもしれない．ベトナムから夥しい数の人がいわゆる「ボート・ピープル」および「ランド・ピープル」として国外脱出を計ったことは広く知られている．マレーシア，タイ，フィリピン，インドネシアなど東南アジア各地に難民キャンプが設置され，最終的に数百万におよぶインドシナ難民が，香港，日本，イギリス，ドイツ，フランス，カナダ，オーストラリア，アメリカにたどり着いた［UNHCR 2000］．下條も，調査地でもボート・ピープルの例があったことを指摘している（pp. 404–405）．長距離移動の体験を理解するうえでは，多くの場所をつなげるとともに，微視的と巨視的な視点を組み合わせる研究が必要となるはずだ．下條は本書で，ニコラス・トーマスと杉島敬志を引いて，「小さ

3）「ローカルな秩序」を強調する本書に生態環境の議論がないことが評者には意外であった．本書ではスコットのゾミア論は触れているが（p. 35, p. 54），メコンデルタの地形，気候，生態，水域がつくる非国家空間論―「水のゾミア」―は掘り下げて論じられていない．メコンデルタの「国家の介入しにくい空間」形成において地勢や気候や生態は大きな要因ではないと考えて良いのだろうか．

4）東南アジア研究では，自然環境論の文脈で Lebel *et al.*［2004］も「ローカル」主義を分析している．Lebel *et al.*［2005］は，scale, position, place という3つの空間概念を整理していて有用である．

5）日本語での「ヴァナキュラー」論には往々にして言語学的視点が抜けていることが多いが，小長谷英代［2017］が例外的に重厚な分析を提供している．

な歴史」と「大きな歴史」の「もつれあい」に注目することを促している（p. 491–492）が，時間的スケールのみならず，空間的スケールにおいてもミクロとマクロのもつれあいがある．

日本でも，世界のさまざまな地域にルーツをもつ人々が隣人として暮らしている今日，静的な空間的枠組みに縛られない研究がますます求められている．ベトナム研究者にこそ，新たなフィールドワーク論と地域研究の方法を切り開く機会が訪れているともいえるだろう．本書で卓越した調査能力と筆力を示した筆者に期待するのは評者だけではない．

引 用 文 献

Gupta, Akhil and James Ferguson, eds. 1997a. *Anthropological Locations: Boundaries and Grounds of a Field Science*. Berkeley, Los Angeles & London: University of California Press.

_____. 1997b. *Culture, Power, Place: Explorations in Critical Anthropology*. Durham & London: Duke University Press.

Lebel, Louis, Antonio Contreras, Suparb Pasong and Po Garden. 2004. Nobody Knows Best: Alternative Perspectives on Forest Management and Governance in Southeast Asia, *International Environmental Agreements* 4(2): 111–127.

Lebel, Louis, Po Garden and Masao Imamura. 2005. The Politics of Scale, Position, and Place in the Governance of Water Resources in the Mekong Region, *Ecology and Society* 10(2). 〈https://ecologyandsociety.org/vol10/iss2/〉

Marcus, George E. 1995. Ethnography in/of the World System: The Emergence of Multi-Sited Ethnography. *Annual Review of Anthropology* 24: 95–117.

Tsing, Anna Lowenhaupt. 2011. *Friction: An Ethnography of Global Connection*. Princeton: Princeton University Press.

UNHCR (United Nations High Commissioner for Refugees). 2000. Flight from Indochina. In UNHCR ed., *The State of The World's Refugees 2000: Fifty Years of Humanitarian Action*. 〈https://www.unhcr.org/3ebf9bad0.html〉

小長谷英代．2017．『〈フォーク〉からの転回―文化批判と領域史』春風社．

横山　智編．『世界の発酵食をフィールドワークする』農山漁村文化協会，2022 年，235 p.

柳澤雅之 *

本書は，世界の発酵食に関するフィールドワークの成果を伝えつつ，その成果と実験室の分析を融合させた新たな研究領域「フィールド発酵食品学」の創設を提案する書である．

本書の目次は以下のようである．

序章 人類と発酵食

第 I 部 主食としての発酵食

1 章 酸っぱさに憑かれた人びと エチオピアのパン類をめぐって

2 章 酒を主食にするネパールとエチオピアの人びとの暮らし

コラム 1 酵母 人類のために進化し続けてきた微生物

第 II 部 副食としての発酵食

3 章 牧畜民の発酵乳加工とその利用

4 章 魚の発酵食をめぐる民族の接触と受容 カンボジア周縁地域を事例に

コラム 2 生業と「農村食」発展途上国

* 京都大学東南アジア地域研究研究所